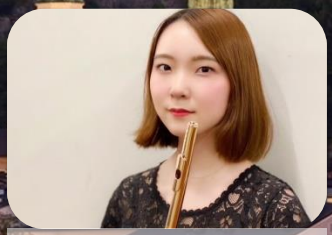
主催：洗足学園音楽大学・大学院

学内リサイタル講座
Arc-en-cielアルコンシィエル
七色の色彩

2021年9月3日（金）
開演：18:00 / 開場：17:30
終演：20:00
会場：洗足学園音楽大学
前田ホール

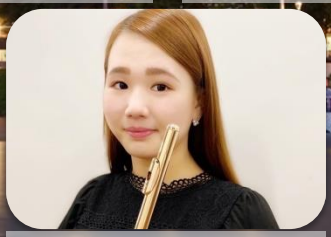
1. 加藤幸恵
ピアノ



2. 川野真奈
フルート

3. 三橋正長
アルトサックス

4. 嶋野晴斗
コントラバス



5. 福井麻菜
フルート

6. 今川萌
アルトサックス

7. 二瓶みづき
ソプラノ

1 加藤幸恵（ピアノ）
F.マルタン ／ 8つの前奏曲より 第1番 第4番 第6番 第8番
Frank Martin (1890-1974) // 8 Preludes no.1.4.6.8

2 川野真奈（フルート）　　伴奏者 横山歩
A.ジョリヴェ ／ フルート協奏曲 第1番
Andre Jorivet (1905-74) // Flute Concert No.1

3 三橋正長（アルトサックス）　伴奏者 原田愛
C.フランク ／ ヴァイオリン・ソナタ イ長調より
César Franck (1822-90) // Sonate pour violon et piano

＊＊＊＊休憩（10分）＊＊＊＊

4 嶋野晴斗（コントラバス）　　伴奏者 小林遥子
G.ボッテジーニ ／ ベッリーニのオペラ《夢遊病の女》による幻想曲
Giovanni Bottesini（1821-89）// Fantaisie sur la Somnambule

5 福井麻菜（フルート）　　伴奏者 横山歩
A.ジョリヴェ ／ リノスの歌
Andre Jorivet (1905-74) // Canto de Linos

6 今川萌 (アルトサックス)　　伴奏者 原田愛
P.ウッズ ／ ソナタ
Phil Woods（1931-2015）// Sonata

7 二瓶みづき（声楽）　　伴奏者 伊藤美佐
Ⅰ. 山田 耕筰 (1886-1965) ／ 作詞 北原 白州 (1885-1942)
からたちの花
Ⅱ. G.プッチーニ ／ 歌劇《 ラ・ボエーム 》第2幕より
Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini (1858-1924) // La bohème
私が街を歩けば　"Quando me'n vo"
Ⅲ. A.カタラーニ ／ 歌劇《 ラ・ワリー 》 第1幕より
Alfredo Catalani（1854-93）// La Wally
さようなら、ふるさとの家よ "Ebben? ne andrò lontana"

⚠ 新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い ⚠
・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

《教授よりご挨拶》

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においでいただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学４年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生 42 名による６回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。各出演日の学生がそれぞれの思いで、プログラムや副題を決め、この日の為に準備をしてまいりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、 現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという喜ばしい実績を持っております。この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座 教授 渡部 亨

《出演者代表よりご挨拶》

日毎に秋の色が濃くなって、芸術にふさわしい季節になってまいりました。

本日はお忙しい中、「Arc-en-ciel～七色の色彩～」にお越しいただき、誠にありがとうございます。この度我々7 名で演奏会を開催する運びとなりましたのは、ご指導・ご支援をしてくださっている先生方、家族や友人、日頃からお世話になっている皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。本公演タイトルでもある「Arc-en-ciel」は、日本語で虹という意味です。楽器や音楽性も違う中、一人一人の音楽が一つの色として存在し七色に混じっていくような情景を表現しました。そんな我々の個性溢れる世界観を是非お楽しみいただけたら幸いに存じます。最後になりましたが、本日の演奏会の開催にあたりご支援ご協力をいただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご指導ご鞭撻のほどお願い致しましてあいさつとさせていただきます。

ピアノコース４年 加藤幸恵

《プログラム》

1　加藤幸恵（ピアノ）

F.マルタン ／８ つの前奏曲 より 第１番 第４番 第６番 第８番

フランクマルタンは、1890 年スイスのジュネーブで生まれた作曲家である。《8 つの前奏曲》は、彼が 57 歳の時に作曲したピアノ曲である。〈第 1 番〉は、重々しくシリアスなメロディーが特徴的である。〈第 4 番〉では、拍子を使わないことで維持されたリズミカルな均一性がとても現代的である。〈第 6 番〉は、いわゆるカノンである。なぜか最後だけ嬰ハ短調の和音で終わり鮮やかで面白い。そして、ミリタリー調で推進力に満ちた〈第 8 番〉で締めくくる。活気と快活溢れるメロディーに、調性と十二音技法の組み合わせがなんとも絶妙で魅力的な音楽である。彼の音楽は無色のようで綺麗な色彩感があり、現代曲らしく魂を込めて演奏したい。

【プロフィール】

神奈川県出身。あずさ第一高等学校出身。5 歳よりピアノを始める。 第 23 回、第 25 回 PIARA ピアノコンクール南関東大会出場。第 20 回北関東コンクール本選出場。2021 年度ピアノコース特別選抜演奏者認定。これまでにピアノを根廻真奈美、八島とも子の各氏に、現在門倉美香氏に師事。

2　川野真奈（フルート）

A.ジョリヴェ ／ フルート協奏曲第１番

アンドレ・ジョリヴェはフランスの作曲家である。自身の発言にもあるが呪文や魔術などを源泉にそのような音楽を取り入れ表現しており、独特な音色感やリズム感は一度聞けば忘れられないだろう。
今回演奏する作品はパリ音楽院の試験のために作曲され、初演は 1950 年 J.P.ランパルのフルート、作曲者の指揮によって行われた。全体に切れ目はないが 4 つの短い楽章で構成されている。冒頭から最後まで緊張感が持続し、その中にも激情的な興奮が混ざりあい決心したように曲が終わる。叙情的でもあり熱情的でもあるこの作品をジョリヴェの信念である音楽に精神性や生命力を持たせた演奏をしたい。

【プロフィール】
千葉県出身。聖徳大学附属女子高等学校音楽科出身。10 歳よりフルートを始める。これまでにフルートを三上麻結、平野正子、ピッコロを菅原潤の各氏に師事。

3　三橋正長（サクソフォン）

C.フランク ／ ヴァイオリン・ソナタ イ長調より

セザール・フランクはフランスを中心に作曲家、オルガニストとして活躍をした人物である。幼少期から音楽の才能を発揮し、パリ音楽院に進学。数多くの賞を受賞。まさに『神童』とも言うべき活躍を見せた。
全 4 楽章からなり循環形式（いくつかの動機をもとに構成され全曲を統一する作曲技法）で書かれたこの作品はピアノとヴァイオリンが音楽的に常に対等であり、両者が会話をするように音楽を作り上げていく。
今回演奏する 3 楽章は「幻想的な叙唱」と副題がつき、憂うような旋律で歌い上げる。憂いや願いを受け、カノン風の旋律による自由なロンドソナタ形式である 4 楽章が始まる。3 つの楽章を想起させ、輝かしく曲は閉じる。

【プロフィール】
千葉県出身。千葉県立成東高等学校出身。
12 歳よりサクソフォンを始める。第 29 回日本クラシック音楽コンクールサクソフォン部門ファイナリスト。 第 26 回 KOBE 国際音楽コンクール C 部門（大学生・一般）木管楽器部門で奨励賞受賞し、同コンクール入賞者によるガラ・コンサートに出演。これまでにサクソフォンを岩柳好美、大和田雅洋の各氏に、室内楽を貝沼拓実氏に師事。

4　嶋野晴斗（コントラバス）

G.ボッテジーニ ／ ベッリーニのオペラ「夢遊病の女」による幻想曲

自身もソロコントラバス奏者として活躍し『コントラバスのパガニーニ』と呼ばれた卓越した技巧の持ち主、ボッテジーニ。多くのコントラバスのための曲を作曲し、チェロと同様のフランス式運弓法をコントラバスに初めて適用したことによっても有名である。後に指揮者に転向し、ヴェルディのオペラ『アイーダ』を初演している。
本日演奏する曲は、ベッリーニ作曲のオペラ『夢遊病の女』のアリアやメロディをもとに変奏曲として作られた。
オペラの舞台はスイスの村であり、夢遊病を患う娘が主人公である。
スイスののどかな田舎の情景を思わせる、優美で愛らしい印象の曲となっている。

【プロフィール】
千葉県出身。習志野市立習志野高等学校出身。中学校で吹奏楽部に入部し、コントラバスを始める。現在、山本修氏に師事。

5　福井麻菜（フルート）

A.ジョリヴェ ／ リノスの歌

「リノスの歌とは古代ギリシャにおける挽歌、葬送の悲歌、叫びと踊りが交錯する哀しみの歌である」
これは作曲者であるジョリヴェ自身がリノスの歌の楽譜の冒頭に書いた言葉である。
リノスとはギリシャ神話に登場する半神であり、神話ではリノスは竪琴の弟子を強く叱りすぎてしまい殺されてしまう。
この曲は 5 拍子のゆったりとした呪文のような哀歌と、7/8 拍子の民族的な踊りが印

象的である。そして竪琴を弾いているかのような連符が激しく奏でられる部分はまるで殺されてしまったリノスの激昂を表しているかのように感じる。哀歌や踊り、激昂が交錯しながら曲は進み最後は激しい怒りや叫びのような強打音で幕を閉じる。

【プロフィール】
静岡県出身。浜松聖星高等学校出身。これまでにフルートを篠田文、中村泉、萩原貴子の各氏に師事。室内楽を渡部亨氏に師事。

6　今川萌（サクソフォン）

P.ウッズ ／ ソナタ

フィル・ウッズはマサチューセッツ州スプリングフィールドに生まれ、ピアニスト、作曲家であるレニー・トリスターノに影響を受けた。卒業後すぐにビバップのサクソフォン奏者として認められ、チャーリー・パーカーの後継者と目された。また、ウッズは自身の録音で7回グラミー賞にノミネートされた。
本日演奏する曲はヴィクター・モロスコ(米)に掲げられており、アドルフ・サックス国際コンクールの課題曲にも選ばれている。全4楽章からなり、楽譜という制約の中で、バップ・ジャズの世界を表現した傑作であり、世界中で広く演奏されている。ジャズとクラシックのクロスオーバーを味わっていただきたい。

【プロフィール】
秋田県出身。秋田県立秋田南高等学校出身。9歳よりサクソフォンを始める。第30回日本クラシック音楽コンクール全国大会出場。また母校である山王中学校と共演するなど、音楽活動の幅を広げている。サクソフォンを成田徹氏に師事、齊藤健太、フィリップ・ガイス各氏にプライベートレッスンを受講。室内楽を貝沼拓実氏に師事。

7　二瓶みづき（声楽）

I.　山田 耕筰 ／ からたちの花
II.　G.プッチーニ ／ 私が街を歩けば
III.　A.カタラーニ ／ さようなら、ふるさとの家よ

I. からたちの花
山田耕筰は10歳の時に父が他界。養子に出され、活版工場で勤労しながら13歳まで夜学で学んだ。耕筰は自伝において、工場でつらい目に遭うとからたちの垣根まで逃げ出して泣いたと述懐している。この思い出を白秋が詞にした。食べるものも無い時代に幼くして働かなければならず、いつも空腹であっただろう。この歌は工場に行く途中にあったからたちの実を食べ、周りの大人たちに優しくしてもらった時の情景が描かれている。

II. 私が街を歩けば
物語の舞台は1830年頃のパリの下町、クリスマス・イヴの夜である。皆で食事を始めた頃に、マルチェッロが別れた恋人ムゼッタを見つける。パトロンのアルチンドロを連れまわしていたムゼッタはやがてマルチェッロに気付き、彼を挑発するように歌を歌いはじめる。

Ⅲ. さようなら、ふるさとの家よ
オーストリア・チロル地方に住む娘ワリーは、隣村の猟師ハーゲンバッハに好意を寄せるが相手にされない。年老いた父は、そんな男より執事のゲルナーとの結婚を奨めた。ワリーと父親は口論となり、ワリーは家を去る決心をする。第1幕のアリア『さようなら、ふるさとの家よ』はここで歌われる。

【プロフィール】
福島県出身。横山慶子舞踊学園にてモダンバレエとジャズダンスを叶みち子氏に師事。5歳よりピアノ、12歳より声楽の手ほどきを受け、これまでに酒井貞子、牧野正人、塩田美奈子の各氏に師事。バーバラ・ボニー、イタリアにてナッツァレーノ・アンティノーリ氏のレッスンを受講。

オペラアリアの解説と歌詞	
プログラム　7番	二瓶みづき　声楽

G.プッチーニ ／ 歌劇《 ラ・ボエーム 》第２幕より

Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini （1858-1924）// La bohème

私が街を歩けば　"Quando me'n vo"

このオペラは 19 世紀半ば、フランス・パリに住む若者たちの夢や恋、友情を描いた、甘く切ない青春物語です。
ミュージカルの《RENT》はこのオペラが元になっていると言われています。

原作は、フランスの文人アンリ・ミュルジェールの実体験に基づく小説『ボヘミアンの生活の情景』で、ボエームとは「ボヘミアン」のフランス語で、自由に生きることに憧れた 19 世紀パリの芸術家の卵たち（もしくは芸術家気取りの若者たち）のことを指します。

今回私が歌うアリアは、クリスマスイヴの夜のワンシーンでムゼッタによって歌われます。
画家の元カレ、マルチェッロがカフェで皆と食事を始めていた時、ムゼッタがパトロンを連れ回しながら店に入って来ます。やがてムゼッタはマルチェッロに気付き、彼が自分と別れたことを後悔するように、自分の魅力について色気たっぷりに歌い出します。この二人は本当はお互いに愛し合っているのに、とにかくいつも喧嘩ばかりなんです。

オペラにはもう一つ、詩人ロドルフォと物語の最後に結核で亡くなってしまうお針子ミミのカップルがいて、こちらはお互いに寄り添っています。なので、この全くタイプの違う 2 つのカップルが舞台にいることが、物語をよりドラマチックに、面白く感じさせます。
因みにムゼッタは勝気で気が強くて見た目も派手なんですが、心根はとても優しい、いい女です。
オペラの最後でミミが瀕死の時、自分が大切にしていたイヤリングを外して薬と医者を呼ぶ為にマルチェッロに渡し、売りに行かせるのです。

Quando men vo soletta per la via,	私が一人で通りを行くと、
la gente sosta e mira	人々は立ち止まって見とれるの
e la bellezza mia tutta ricercar in me	美しさをすべて、私から探そうとするのよ。
da capo a pie'…	頭から足まで・・・
… ed assaporo allor la bramosia	そして、じっくりと味わうの。
sottil, che da gli occhi traspira	目に表れている視線を
e dai palesi vezzi intender sa	それを分かってやっているの。魅力ある仕草から
alle occulte beltà.	神秘的な美しさまで
Così l'effluvio del desìo tutta m'aggira,	こうして私は、欲望の香りに包まれて、
felice mi fa!	幸せになるのよ!
E tu che sai, che memori e ti struggi	あなたは分かっている。思い出しては押しつぶされそうに
da me tanto rifuggi?	なり、私から逃げ出したいのね?
So ben: le angoscie tue non le vuoi dir,	私はよく分かっている。あなたが自分の苦悩を言いたくな
ma ti senti morir!	いだろうし、
	死にそうな気持ちを感じていることもね!

A.カタラーニ ／ 歌劇《 ラ・ワリー 》 第１幕より

Alfredo Catalani （1854-93） // La Wally

さようなら、ふるさとの家よ "Ebben? ne andrò lontana"

現在では公演されることがほとんどないですが、この《ラ・ワリー》は 1892 年ミラノ・スカラ座における初演時には大成功を収めたといいいます。現在ではこのアリアだけが頻繁に演奏されています。

オペラの舞台となっているのは 1800 年頃のスイスの田舎のチロル地方です。
地主シュトロミンガーの娘、ワリーは狩人のハーゲンバッハに片想いをします。ハーゲンバッハの人格を知っているワリーの父はそのことに気づくと、彼女のことを愛している執事のゲルナーと結婚しろと言います。しかしワリーは拒否。ゲルナーとの結婚話を拒否したワリーに、父は「家から出て行け！」と言い、それを受けて歌われるのが、この〈さようなら、ふるさとの家よ〉であります。

物語はこの歌の後に、登場人物たちの恋心が交錯していきます。
父が亡くなり遺産で豊かな生活を送っていたワリーは、村祭りでハーゲンバッハに会えることを期待してパブに行きます。彼はそこにいますが、すでにパブの女将アフラと婚約していました。ワリーは女将に言いがかりをつけてひどく侮辱。そしてハーゲンバッハは彼女とキスできるかどうか他の男たちと掛け、言葉巧みにワリーを誘ってキスを果たし、掛け金を得ます。それがアフラのための仕返しだったことに腹を立てたワリーはゲルナーにハーゲンバッハを殺させようとします。

しかし家に帰って冷静になったワリーは自分の行動を激しく反省。するとゲルナーがやってきて、ハーゲンバッハを襲って谷底に投げ入れたと報告します。パニックになったワリーは現場に駆けつけ、重傷のハーゲンバッハを助け上げます。アフラを愛していたはずのハーゲンバッハでしたが、この時に自分の本当の気持ちに気づき、ワリーに愛を告白をします。月日が経ち、ひとりぼっちで自分に嫌気がさしたワリーは雪の山の上の小屋に引きこもり、自殺を考えています。
そこにハーゲンバッハが現れ、麓に降りて祭りを楽しもうと誘い、二人は固く抱き合います。一縷の希望がわいてきた彼女はそれに従い、山を下りますが、途中に雪崩が起きてハーゲンバッハはそれに飲まれ底に落ちていってしまいます。ワリーがいくら呼んでも返事はありません。
最後、絶望したワリーは自ら谷底へと身を投げて、このオペラは終わります。

Ebben?… Ne andrò lontana,	ならば？…私は遠くに行きましょう
come va l'eco della pia campana	聖なる鐘がこだましていくように
là, fra la neve bianca; là fra le nubi d'ôr;	あの白い雪の中に、金色の雲の間に
laddove la speranza è rimpianto, è dolor!	そこで望めるのは、悔恨、そして苦悩！
O della madre mia casa gioconda,	ああ、幸せだった私の母なる家よ
la Wally ne andrà da te, da te lontana assai,	ワリーはお前から、お前から遥か遠くへ行くでしょう
e forse a te non farà mai più ritorno,	そして多分お前のもとには二度と戻らないでしょう
ne più a rivedrai! mai più, mai più.	ワリーを二度と見ることはないでしょう！けっして
Ne andrò sola e lontana……ecc.	私はひとりで、遠くへ行くでしょう…… etc.